

乳幼児と音楽との関連について

— R・シュタイナーの人間観に基づく—考察—

渡 辺 優 子

On the Relation between Infant and Music
— A Consideration based on the Idea of Human
being of R. Steiner —

by

Yuko Watanabe

はじめに

人間がこの世に生まれて最初に過ごす乳幼児期は、なんとという驚きと謎を秘めているのだろう。急速な成長をとげるのに、成人してからはその時期の記憶はほとんど残らない。大人は、乳幼児を目の前にして、忘れてしまった、人間としての基本的な部分を再認識させられ、又、未来への力を感じる。

この乳幼児期の特質について、R・シュタイナーの人間観を基礎として、特に、音楽との関連を考察してみたい。考察の前提として、次のことを挙げておきたい。それは論理的であることを目ざすが、単なる文献批判ではないということである。その中に入って考える態度をとりたいと思う。シュタイナーの言葉は、生きた思考を目ざしている。シュタイナーの人間についての概念は、生成、変容してゆくものの表現であり、思考を通して人間の中に響かせなければ、意味を持ち得ないと考えるからである。

吉田武男は、「シュタイナーの教育方法論の特質」⁽¹⁾の中で、シュタイナーの発達観と教育方法を詳細に述べているが、基本的な人間観は再考を要すとしている。根は切り捨て、花のみを見る方法では、シュタイナーの教育論は枯れ死んでしまうであろう。

I シュタイナーの人間観

考察の基礎となるシュタイナーの人間観とその背景について簡単にまとめておきたい。

シュタイナーは生まれつきの霊能者であった。彼は幼い頃より、他の人には見えない世界を感じ知していた。彼は自分の世界と外の世界の接点を求め、認識を深めていった。彼にとって霊的世界（理念が生きている世界）は実在のものであり、感覚世界は、霊的な力が、物質という形をとって現われているものであった。それ故に彼は、肉体と魂、自然と人間、神と人間を対立したものととらえる二元論には組しなかった。人間の中に、肉体と魂と共に、霊的な力（神的な力、あるいは宇宙的な力）が働いているというのである。その力は、人間の思考を通して、明瞭に認識されなければならない。宇宙的な力の中をぼんやりさまよっている人間には、自由がないというのである。

シュタイナーは、人間考察の手がかりとして、次の観点をあげ、それらの関係を論じている。⁽³⁾

- (1) 人間の7つの構成部分。
- (2) 人間の魂の3つの要素である、思考、感情、意志と、その中に働く反感と共感の力。
- (3) 人間の12感覚。
- (4) 人間の3つの意識状態、目覚め、夢、眠り。
- (5) 人間の成長期における3つの発達区分、0歳～7歳、7歳～14歳、14歳～21歳。

(1) 人間の7つの構成部分

- 1 肉 体 知覚される物質部分、
鉱物界と関連を持つ。
- 2 エーテル体（生命体）
物質に生命を与える目に見えない宇宙的な力、
植物、動物、人間の中で働く力。
- 3 アストラル体（感覚体）
魂（感覚と、感覚の影響を強くうけた感情）の内容としての力であり形象、
動物もになっている。
- 4 自 我 魂の核であり、人間だけがになっている、個人の独自の部分。思考力によって
2面への働きかけを持つ。一方は感覚的世界へ、もう一方は真・善・美の世界
へ。
- 5 霊 我 霊的部分の知覚現象として現われる。
自我がアストラル体を意識化することによって現われる。
- 6 生命霊 霊的部分の生命的現われ、
自我がエーテル体を意識化することによって現われる。
- 7 霊 人 霊的部分の物質的現われ、
自我が肉体を意識化することによって現われる。

以上の中で、現在の人間は、肉体、エーテル体、アストラル体、自我をになっているが、霊我、生命霊、霊人の3つの部分は、萌芽として見い出されるだけである。霊我、生命霊、霊人は、遠い将来にあって発達する部分であるが、現在の人間であっても発達させる可能性はあるとしている。

(2) 人間の魂の3要素と、共感、反感の関係について

思考には反感が強く働き、意志には共感が強く働いているが、その場合の反感も共感も無意識の中で働いており、感情の中で、共感と反感がはっきり現われる。

(3) 12感覚

人間の感覚の中には、性格として、意志と感情が働いており、子供の場合は、意志が強く働き、それが人間の一生の中で変化し、意志と感情の結びつきを経過し、老人になると、思考と感情の結びついた性格を持つようになる。人間には12の感覚があり、その傾向から次のように分類できる。

- 1 主として意志の性格を持つ感覚。
触覚、生命感覚、運動感覚、均衡感覚。
- 2 主として感情の性格を持つ感覚。
嗅覚、味覚、視覚、熱感覚。
- 3 主として思考の性格を持つ感覚。
自我感覚（相手の自我を感じる感覚）。
思考感覚（相手の思考を感じる感覚）。

聴覚。

言語感覚。

以上の感覚は単独でも働くが、通常は、それがいくつか結びついて働いている。たとえば、物の形を見るためには、運動感覚がまず働いて、それが視覚と結びつくことによって見るができる。

(4) 人間の3つの意識状態について

人間の3つの意識状態も、他との関連で観察される。目覚めは思考と、夢は感情と、眠りは意志と関係づけられる。

(5) 人間の成長期における3つの発達区分

肉体、エーテル体、アストラル体は、人間の成長期において、年齢に応じて、独自の発達をとげゆく。各成長期の課題をなしとげることを基礎として、次の段階へ発達して行く。

1 0歳～7歳

主として肉体が形成される時期。

2 7歳～14歳（歯牙交代期より14歳まで）

エーテル体が独立して働きはじめる時期。

3 14歳～21歳（性的成熟期より21歳まで）

アストラル体が独立して働きはじめる時期。

Ⅱ 乳幼児期の特質について

シュタイナーは、0歳より7歳までは、肉体が形成される時期であるとしている。誕生と同時に、それまで母胎につつまれていた肉体は呼吸を始め、空気をうけ入れ、栄養や水分を口から直接受け取るようになる。感覚もしだいに開かれてゆく。聴覚・触覚・味覚・視覚等が、生まれてすぐに働きはじめる。感覚活動を通し、周囲の世界が子供に働きかけてゆく。子供は周囲の世界の中でも、人間には特別の興味を持っているように見える。人の顔を見、声を聞いて喜び、あるいは恐れ、人が使っている物を手にとり、使い方をまね、言葉を覚える。歩けるようになれば外の世界へとび出して行き、太陽、水、土、風、動物、植物等の自然の世界が、あたかも人間と同じ生命あるものと確信しているようにふるまう。友達を作り、歌い、踊りはねまわる。お話に夢中になり、絵の中へ自分の世界を描き出す。

シュタイナーは、乳幼児期を、模倣の時期であり、子供は、世界が道徳的であるという確信を持っているという⁽⁴⁾。特に乳児期にこの傾向は強く現われる。乳児は周囲の世界を疑わず、自分が困ったことは、周囲が必ずなんとかしてくれると信じているようである。お腹がへると、満足させてもらえるまで泣く。抱いてもらいたい時は抱いてもらえるまで泣く。周囲に対する絶対的な信頼がなければできないことである。乳児は外界に対して強い共感を持っている。共感の力を持って、全身で周囲の世界を感じている。外の世界が、乳児の全身に働きかける。大きな音には全身で反応する。乳児の感覚活動の中に働いているのは、共感であり、眠れる意志の働きである。自分という意識は働かず、反感の中深く隠されている。乳児にとって、自分は外の世界なのである。

喜びや悲しみ、記憶も乳児の中に現われるが、眠れる意志の働きを強くうけ、独立したものとして内的に思われず、感覚活動の中にあられるだけである。シュタイナーは、乳幼児期にはエーテル体、アストラル体は、莖につつまれていて、まだ独立して働くことはできず、乳幼児が外から受けとる力は、肉体を形成するために働くと言う⁽⁵⁾。乳幼児は、空気や栄養をとり入れ成長するだけでなく、感覚を通して受け入れたものからも、肉体を作って行くというのである。感覚的なものの中

には、アストラルな力や、エーテルの力も流れているが、それが乳幼児のアストラル体やエーテル体に直接働きかけず、肉体を作る力に変換されるのである。

思考も幼児に働いている。幼児もよりよい方法を考えることができる。しかし、その思考も独自の働き方をしている。シュタイナーは、2つの認識形態が人間に見られると言う。1つは、思考、反感、記憶、概念の系列であり、もう1つは、意志、共感、想像力、形象作用の系列である⁽⁶⁾。前者は、目覚めた意識のもとでなされる通常の認識形態であり、後者は、夢のような、あるいは眠りのような意識状態のもとでなされる認識形態である。幼児に見られる思考は、感覚活動の中に働く、意志、共感、想像力、形象作用の現われである。没我的に感覚活動を行った時に現われる形象作用を、大人は目覚めた自我の働きを持って、思考、反感、記憶、概念の系列へ組みこむ可能性を持つが、幼児の自我は内的に働いていない。幼児の思考は、環境の中にあるものの現われとして、幼児の中に現われ、そのまま、夢みる、あるいは眠りの意識の中に沈み、肉体の中深く働く力に変えられてしまう。

乳幼児は以上のように周囲の環境を手本として、共感と喜びを持って、環境と結びつき、肉体を作りあげる。肉体が形をととのえる7歳の頃より、肉体を作るために働いていたエーテル体が独立して働くようになり、幼児は次の成長期へ入って行く。乳幼児に対して、エーテル体が独立してから現われる能力である記憶や、アストラル体が独立してから働く抽象的な論理を強調することは、無意味なばかりか、肉体的な成長を損なうと言うのである。

Ⅲ 乳幼児の音楽とのかかわり方について

聴覚は、母親の胎内にいる時よりすでに聞かれている。生まれてから早い時期より、人間の声とそうでない音の違いを区別しているようである。大きな音には全身で反応する。乳児期は、なによりも人間の声と、それに伴う動作、表情等を全身でうけとめている。乳児期後期より、歌ってもらうことを喜び、自分でも歌い、踊り、遊び、音楽に結びついた活動が開始される。

シュタイナーは、幼児期において、音楽のリズムや響きを喜び、音楽にあわせて踊ることが、器官形成を促す力になると言う。幼児は、歌を歌う時には、リズムを最初にとらえる。楽器にむかうと、大人のまねをして音を出し、出て来る音が音楽としてまとまっていなくても気にせず、音を出すことを楽しむ。幼児が音楽の中から受け取るのは、肉体と意志に結びついたリズムと、素材の性格としての響きなのである。リズムは音楽の中だけではなく、宇宙の中に、自然の中に、人間の中にも響いている。シュタイナーは、人間の内部では、呼吸、血液循環、神経の働き等が、リズムを作り出し、内的な音楽として鳴り響いていると言う。幼児が音楽を受けとる時、共感と意志が強く働いている。聴覚だけが働くのではなく、12感覚が種々の結びつきを持って働く。歌いながら踊ったり、遊んだりする中に、聴覚、運動感覚、均衡感覚、生命感覚、視覚、熱感覚、自我感覚、言語感覚等が働いている。幼児は音楽のリズムで、諸感覚の中に働いているリズムを調整する。幼児は、大人のように自我の働きによって、感覚から受け取るものを意識化はしない。幼児は、リズムや響きを、肉体を作り、調整する力として体の中に受け入れる。「内的な音楽」を作りあげているのである。体の中にとり入れられたリズムは、7歳以後、エーテル体が独立し、ファンタジーによって、外界に働くリズムを感じとる基礎となってゆく。

終 り に

以上、乳幼児期を、シュタイナーの人間観を軸として考察してみた。最初に述べた通り、シュタ

イナーの人間についての諸概念は、すべて生きているのである。それは、死んだものとして固定化することなく、相互に関係性を持ちながら、生成、変容してゆくものなのである。これをもっと深く、頭の中だけでなく、体の中にまでも、生かすことができるならば、乳幼児期について、もっと多様な考察がなされるべき可能性は大きいだろう。しかし、そのためには、私にとって時間が必要である。本稿は、私がシュタイナーの人間観から受けとった、1粒の思考の種子としての表現にすぎない。種子が周囲の力をうけとり成長してゆくように、この思考の種子を、今後さらに成長させ、研究への出発点にしたいと願っている。

注

- (1) ルドルフ・シュタイナー (1861~1925) 哲学者・神秘学者。人智学を提唱する。教育、芸術、科学(医学、農学)等、多方面に貢献した。
- (2) 教育学研究第54巻第2号 p.156 ~ p.165
- (3) R・シュタイナー「神智学」高橋巖訳 イザラ書房, 1904, p.29 ~ p.65
R・シュタイナー「教育の基礎としての一般人間学」高橋巖訳 イザラ書房, 1919
- (4) 「一般人間学」第9講 p.150
- (5) R・シュタイナー「霊学の観点からの子供の教育」高橋巖訳 イザラ書房, 1907, p.25, p.26
- (6) 「一般人間学」第2講 p.26 ~ p.28
- (7) 「霊学の観点からの子供の教育」 p.34 ~ p.35
- (8) R・シュタイナー「人智学と芸術」西川隆範訳 平河出版社, 1923, p.22

参考文献

- K・W・ファイルマンズ, ファン・エミヒョーベン, 「ルドルフ・シュタイナー」, 伊藤勉, 中村康二訳, 人智学出版社, 1932
- 高橋巖「若きシュタイナーとその時代」平河出版社, 1986